

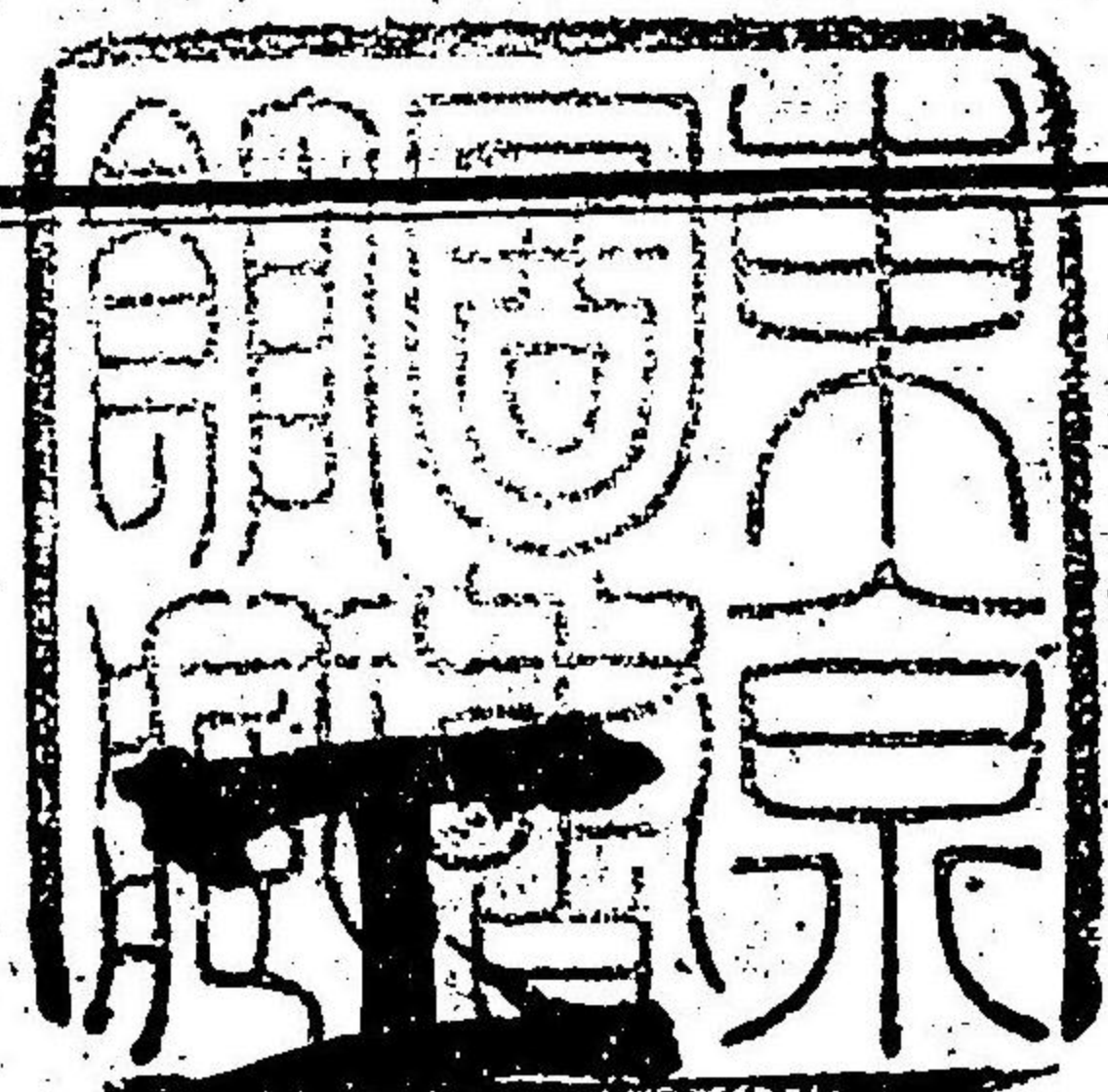
9-100

229

國教大經

第四號

賢所遙拜所設立贊成并推戴員名簿



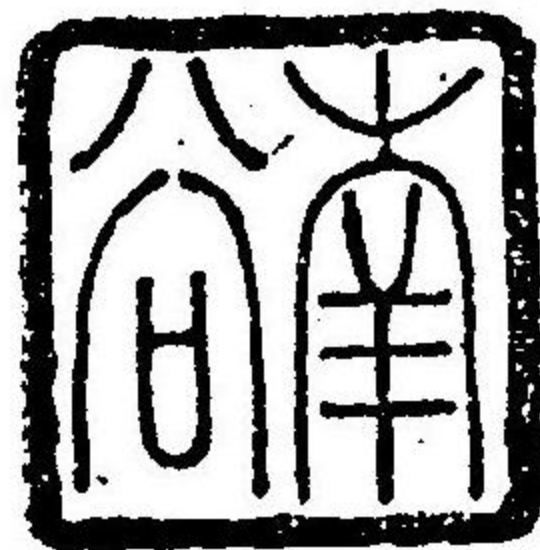
天

壤



一無六窮

後三位岩下方平



旨趣

賢所は天祖威靈の憑る所歴世の皇靈を仰て以て天職を治め給ふ
處ふりこの勅語あり今や天運循環し百度惟れ新にして神器を永
遠不侵の所に奉せらるゝ誠は國體を重せらるゝ所以にして固よ
り私議すへきものにあらざるなり謹て考るに現今人智日に進む
の時に當り人民をして國體の尊嚴ふるを知らしめすんば他日に
至り倫理壞滅し秩序を紊亂する事無さを保せざるは有志士の常
に憂とする處なり故に全國有志の賛成を募り且つ其筋の認可を
仰き府下輦轂の下に遙拜所を設け人民をして遙拜せしめ國體の
尊嚴ふる所以の道を知らしめんと欲す因て同志の諸君朝野を問
はす左の名義に基き廣く賛成あらむ事を希望す

明治二十三年七月

從三位 方平 書

誓旨

天壤無窮の寶祚を奉戴し。金匱無缺の國體を固守し。皇國臣民の本
分を盡すべし

明治二十四年三月

發起 飛田昭規

國教大經

追加第四號

靈魂學士 飛田昭規編述

賢所遙拜所設立ニ付賛成願

不肖儀。去ル明治十四年神道大會議ノ際諮詢掛リ相勤候。然ルニ祭神管長皆 勅裁ニ相成ラシ事ヲ出願致シ。會議ヲ盡サレ候後。今年明治廿六年ニ至ル。十三年間。東奔西走漸ク本書ニ記載スル如ク相運ビ候ニ付。今般府下整敷ノ下ニ 賢所遙拜所ヲ設ケ。勅裁ヲ奉戴シ。令旨ヲモ遵守致シ。臣民ヲシテ國體ノ尊嚴ナル所以ノ道ヲ知ラシメント欲スルノ外。他無ク候間。官幣社別格官幣社奉仕ノ職ニ於テモ。厚ク御賛成被成下候テ。 聖意ヲ貫徹致シ候様有之度。此段奉願候以上

但シ國教大經一部相添。尙次號ニ賛成者續々印刷シ可申候也

明治廿六年七月四日

福島縣平民

飛田昭規

東京牛込區東五軒町三十八番地

全國官幣社

別格 宮司總代

三室戸和光殿

官幣社

鹿島則泰殿

官幣大社 三十四社
 官幣中社 二十四社
 官幣小社 八社
 別格官幣社 二十一社
 三日合百七十社
 合計五十六社

國幣中社 四十九社
 國幣小社 四十四社
 合計九十三社

明治廿六年六月廿日

宮司總代廣瀨神社宮司 西内成郷

交代

加茂神社宮司 三室戸和光
 鹿島神社宮司 鹿島則泰

明治廿六年七月四日

賢所遙拜所設立ニ付賛成取計願

不肖儀。去ル明治十四年神道大會議ノ際諮詢掛リ相勤候。然ルニ祭神管長皆 勅裁ニ相成ラシ事ヲ出願致シ。會議ヲ盡サレ候以降。今年明治廿六年ニ至ル。十三年間。東奔西走。漸ク本書記載スル如ク相運ビ候ニ付。今般府下整敷ノ下ニ 賢所遙拜所ヲ設ケ。勅裁ヲ奉戴シ。令旨ヲ遵守致シ。臣民ヲシテ國體ノ尊嚴ナル所以ノ道ヲ知ラシメント欲スルノ外。他無ク候間。全國府縣鄉村社ニ於テモ。 聖意ヲ貫徹致サセズニハ。國體ニ於テ不相濟儀ト存シ候次第有之候間。賛成爲致候様。御取計有之度。此段奉願候也。但シ國教大經一部相添。尙次號賛成者人名續々印刷致シ可申候也。

明治廿六年七月

福島縣平民

飛田

昭規

東京牛込區東五軒町卅八番地

全國府縣鄉村社并無格社神宮總代

府縣社 四百六十社

郷社 三千四百七十社

村社 五萬二千四百一十一社

合計五萬六千二百二十五社

無格社 十三萬六千九百七十社

府縣鄉村社并無格社

合計十九萬三千三百六十七社

祠官祠掌總代

明治廿六年七月

各位等願ニ不應時ハ全國各郡長ニ依頼スル者トス

全國各縣知事閣下ニ差出候書面之寫

謹て惟るに。我

不肖昭規

天祖の寶祚と無窮に期し玉ひしより。歷世の天皇を歴叙する者。未だ一定せずして今日に至る事。恐らくは 國體の精華を顯彰する所以にわらず。因て昭規が誠意を以て之を古今に徴し。この 天壤無窮歷代鑑を編輯し。在來の謬りを正して以て。府下の公私學校に配府せんと伏て願はくは。閣下能く一覽を賜ひ。以て昭規が微忱を諒し。之と部下の中私の中小學校に頒ちて以て世の惑と明さん事。千萬懇祈の餘り。茲に 天壤無窮歷代鑑并。主意書等と上りて。昭規が所見を陳述す。仰き願はくは。閣下御採納あらん事。熱望の至りに堪へざるなり。誠惶頓首謹言。

明治廿四年十一月

飛田 昭規 印

各縣知事閣下各學務員御中

別紙

追而。賢所遙拜所設立ノ期ニハ。必ラズ賛成ヲ懇願仕候間。宜敷御賛助ヲ仰キ候也

福島縣平民

飛田

昭規 印

東京今川小路三丁目

明治廿四年十一月

各縣知事閣下學務員御中

官立五ヶ所

全國公立學校二萬四千六百二十九ヶ所

私學校二萬五千三百七十四ヶ所

公私合計五萬〇〇三ヶ所

官立五ヶ所

東京府知事

富田 鐵之助君

公立三一九	私立四七〇〇	神奈川縣知事	內海 忠勝君	尋常師範學校長	須田辰治郎君	屬官	武 昌 吉君	屬官	大東 重美君
公立七三三	私立七五	新瀨縣知事	籠手田 安定君	屬官	今井 退藏君	屬官	土居 辨次郎君		
公立一〇一四八	私立八	埼玉縣知事	久保田 貫一君	屬官	堀江 敬愼君				
公立四一〇〇二		群馬縣知事	中村 元雄君	尋常師範學校長	瀧澤 菊太郎君	屬官	岩神 正笑君		
公立三七〇〇	私立三八七	千葉縣知事	藤島 正健君	屬官	豐岡 俊一郎君	同	神明 久作君		
公立七三六	私立六〇七四二	茨城縣知事	石井省一郎君	尋常師範學校長	越 智 直君	屬官	村田 忠恕君		
公立四〇六	私立三四六	栃木縣知事	折田 平内君	參事官	水間 瀨 柔三君	尋常師範學校長	中村 真金君		
公立三三九	私立三四六	静岡縣知事	時任 爲基君	屬官	神 谷 厚君	同	山内 輝民君		
公立三四四	私立三四六	山梨縣知事	中嶋 錫胤君	參事官	尾越 悌輔君	屬官	福島 忠一君		

公立二二九	私立二四五	長野縣知事	淺田 徳則君	尋常師範學校長	長倉 雄平君	屬官	長 田 章君		
公立六八四	私立三六五八	宮城縣知事	船 越 衛君	屬官	梅若 誠太郎君				
公立三〇四	私立一三八	福島縣知事	渡 邊 清君	屬官	黒井 小源太君	同	中川 駿太郎君		
公立四六三	私立四六四	岩手縣知事	服部 一二君	屬官	岡 齊君				
公立五四八	私立五五〇	青森縣知事	佐和 正氏君	參事官	石井 信敬君				
公立四四三	私立四四九	秋田縣知事	鈴木 大亮君	屬官	青木 定謙君	同	小谷 茂實君		
公立三〇七	私立三〇九	京都府知事	北垣 國道君	參事官	告 森 良君				
公立三九一	私立三九一	大坂府知事	山田 信道君	參事官	鈴木 馬左也君				
公立四八九	私立四九三	兵庫縣知事	周布 公平君	屬官	佐藤 保佑君				
公立六七九	私立六八三								

三重縣知事	成川 尚義君	屬官	上野 錄次郎君
公立六五九	私立二、二五六	參事官	溝部 惟義君
滋賀縣知事	大越 亨君	屬官	田邊 敦君
公立三七九	私立三七九	參事官	加藤 寬六郎君
岐阜縣知事	小崎 利摩君	尋常師範學校長	大久保 介壽君
公立一〇五四	私立一、〇七一七	屬官	籠田 信次君
福井縣知事	牧野 伸顯君	屬官	松山 顯武君
公立五七四	私立五七四	參事官	中川 審六郎君
石川縣知事	岩山 敬義君	參事官	高木 承孝君
公立七二七	私立七三三	參事官	梶川 正温君
富山縣知事	森山 茂君	屬官	園城寺 文藏君
公立五二五	私立五二七	參事官	田中 知邦君
和歌山縣知事	千田 貞曉君	參事官	淺井 元君
公立七三一	私立七三一	同	管 英治君
奈良縣知事	小牧 昌業君	屬官	淺井 馨君
公立三八五	私立三八六	屬官	大多和可也君
鳥取縣知事	西村 亮吉君	屬官	渡邊 恭輔君
公立三八五	私立四二五	屬官	和田 徹君
島根縣知事	筱崎 五郎君		

公立六四五	私立六五二	參事官	田中 知邦君
岡山縣知事	千坂 高雅君	參事官	淺井 元君
公立四八七	私立四八七	同	管 英治君
廣嶋縣知事	鍋島 幹君	屬官	淺井 馨君
公立八五八	私立八六八	屬官	大多和可也君
山口縣知事	原 保太郎君	屬官	渡邊 恭輔君
公立九〇〇	私立九〇〇	屬官	和田 徹君
德島縣知事	關 義臣君		
公立三三六	私立三三六		
香川縣知事	谷森 眞男君		
公立二七七	私立二七七		
高知縣知事	中野 健明君		
公立四二二	私立四二四		
長崎縣知事	中野 健明君		
公立四三四	私立四三五		
福岡縣知事	安場 保和君		
公立七三六	私立七三九		
大分縣知事	岩崎 小二郎君		

公立五七四 私立五七四 尋常師範學校長 小野禎一郎君 屬官 坂本 永範君

佐賀縣知事 樺山 資雄君 尋常師範學校長 小宮山弘道君

公立三二三 私立三二三 熊本縣知事 松平 正直君 屬官 藤崎 熊雄君

公立六八三 私立六八五 宮崎縣知事 永峰 彌吉君 參事官 山田 邦彦君

公立三二六 私立三二八 鹿兒島縣知事 山内 提雲君 參事官 山田 邦彦君

公立七〇七 私立七〇七 山形縣知事 長谷部 辰連君 參事官 簿 定 吉君

公立五七〇 私立五七三 北海道長官 渡邊 千秋君 屬官 關原 彌里君

沖繩 公立一〇三 公立學校總計二四六二九 私立學校總計二五三七四

推 戴 員

正四位 押小路實潔君 近藤修之助君 柿沼 廣 身君
落合 直 亮君 社寺局長阿 部 浩君 正六位 大倉喜八郎君
正四位 岩崎彌之助君 從四位 岩 崎 久 彌君 從五位 三井八郎右工門君
勳四等 從四位 澁 澤 榮 一君 從五位 高島嘉右衛門君 神宮々司 鹿 島 則 文君
勳三等 警視總監園 田 安 賢殿 皇太后后大夫 杉 孫七郎殿 東京府 富田鐵之助殿
從三位子爵

書籍 獻納願

一冊

私儀

今般編述出版仕候處參考ノ爲、獻納仕度候間御採納被成下度奉願上候也

明治廿六年七月

各大臣閣下宛 文部大臣井上 毅殿

納本却下ニ相成御諭

右ハ公衆利益ノ爲メ、獻本致シ度義ニ付東京圖書館ニ申出候方可然旨ヲ以テ返却ニ相成候間其旨本人ニ御示シ願書返却方御取計有之度此段申入候也

明治廿六年七月十九日 牛込區長佐伯惟馨殿

東京府書記官 山縣伊三郎印

福島縣平民 飛 田 昭 規 印 牛込區東五軒町廿八番地

海軍大臣伯爵西郷從道殿

海軍省へ献納ノ國教大經ハ一應調査可致趣ニ付現本同省へ差出スベシ

明治廿六年七月廿一日

東京府應印

宮内大臣子爵土方久元殿

國教大經宮内省へ献納出願ノ分査閱上現本ヲ要スル趣ニ付副本一部當廳へ差出スベシ

七月廿二日

東京府應印

農商務大臣伯爵後藤象二郎殿

國教大經登册農商務省へ献納出願ノ分該省へ直ニ差出スベシ

七月廿二日

東京府應印

大藏大臣渡邊國武殿

東京府指令第三七九五號

牛込區東五軒町卅八番地

飛田昭規

本月十三日付國教大經登册大藏大臣へ献納願ノ件聽許相成候ニ付同省へ直ニ納本スベシ

明治二十六年七月廿二日

東京府知事 富田鐵之助印

一國教大經

一册

右納本正ニ受領及鳴謝候也

明治廿六年七月廿七日

大藏大臣官房第三課長書記吉田市十郎印

飛田昭規殿

内閣總理大臣伯爵伊藤博文君

外務大臣

陸奥宗光君

陸軍大臣伯爵大山巖君

司法大臣

芳川顯正君

遞信大臣伯爵黒田清隆君

從四位伯爵近衛篤磨君

正三位候爵久我通久君

從一位久我建通君

正三位候爵鍋島直大君

從四位伯爵一條實輝君

從五位鴻池善右衛門君

從七位本間光輝君

住友とく君

從六位小西新右衛門君

守田治兵衛君

正六位勳三等福島中佐安正君

記

國教大經

一部

右正ニ落手仕候也

六月卅日

福島中佐安正印

飛田昭規殿

市島德三郎君

正六位安田善次郎君

第壹號ヨリ四號ニ至ル

合計五十一萬五千五百九拾余人ノ賛成者及ヒ推戴員

恭ク惟ルニ本朝

神聖相承ク。

皇統連綿トシテ。終古敢テ渝ルコト莫シ。國體ノ尊嚴ナル。名分ノ正シキ。萬邦實ニ其比
ヲ見サル所ナリ。夫レ君ハ上ニ君ト爲リ。臣ハ下ニ臣ト爲リ。君臣ノ分肅然トシテ。決シ
テ紊亂セズ。或ハ命ニ逆セ。順ヲ失フモノアル時ハ。王帥一タビ征スレバ。蕩平掃滅セ
ズト謂コトナク。彼傑驍將門ノ如ク。彼ノ強力貞任カ如シ。其餘區々タルモノ。何ソ論ス
ルニ足ランヤ。是レ列 聖在天ノ神靈。

皇室ヲ擁護シ。名臣累代忠良匪躬ノ節ヲ盡シ。因テナリ。抑々

天祖ノ國土ヲ以テ。皇孫ニ授ケ給ヒ。時ニ方リ。嚮ニ顯幽分界ノ大憲ヲ確メ。然シテ。授
クルニ神器ヲ以テシ。教ユルニ天壤無窮ノ勅ヲ以テセラレシヨリ。今上天皇ニ至ルマ
テ。年ヲ經ルコト悠遠ナリト。直ニ泝テ之ヲ考ルトキハ。恐レ多クモ。今上天皇ハ。皇孫
ト一體ト稱シ奉ルモ。決シテ妨ケアルコト莫ク。四千余萬ノ臣民ハ。均シク是レ。皇孫
ニ奉仕セシ。臣民ノ子孫ナリ。皇室ノ分脈ナリ。又泝テ之ヲ視ルトキハ。吾人同胞共ニ。父
祖ニ^〇テ直ニ皇孫ニ隨テ。降下スト謂フモ亦可ナリ。本朝ハ從來。群類集合シテ國ヲ成
スモノト。大ニ其意ヲ異ニシ。一家族ヲ以テ。一國ヲ成シタルモノナリ。是ヲ以テ異邦ノ
例ヲ以テ。本朝ヲ論スヘキモノニ非ス。他ニ其類例ナキハ。是レ本朝ノ本朝タル所以ナ

リ。蓋シ祭政一致ハ本朝ノ故例。政治法律皆。皇祖皇宗ニ告ケテ。而ル後ニ之ヲ施キ行
ヒ臣民モ亦報本反始ノ誠ヲ以テ。祭祀怠リナク。忠孝共爾全ナルヲ得タリ。古來 宮中
ニハ 賢所ヲ置カレ。天皇親祭ノ義アリ。臣民モ今亦遙拜シテ忱誠ヲ效シ。以テ上下
一致ノ美ヲ儆シ。天壤無窮ノ國體ヲ奉シテ忘ル。コトナシ。夫レ政ハ則テ祭リニシ
テ。則テ政ノ本タル所以ノ義ヲ明ニスルナリ。是ヲ以テ。國教ノ大經ハ。

賢所ヨリ重キハナク。國政ノ大綱ハ祭祀ヨリ貴キハアラズ。明治十四年四月十九日。神
道總裁一品有栖川幟仁親王ノ令旨ハ。實ニ斯道ノ要ヲ言明セラレタルモノナリ。苟モ
此令旨ヲ奉讀スルモノ。誰レカ國教ノ明々白々。天地ニ亘テ窮リナキヲ思ハサルモノ
アラソヤ。回顧スルニ。中世以降。蕃神。胡鬼。尊崇ノ風浸染シテ。國教ノ義明カナラズ。賢
所遙拜ノ如キ。香トシテ聞クコト莫シ。維新ト共ニ復古ノ典大ニ舉ルト雖。亦耶蘇ノ
教ノ入り來ルアリ。是ニ於テカ。大ニ國教ノ義ヲ明白ニシ。神聖ノ大道ヲ發揮スルニ。ア
ラズンバ。風移リ。俗易リ。或ハ臣民ノ義ヲ省ミス。肇國ノ本ヲ怠ル。モノナシトセズ。是
誠ニ憂慮スヘキ所ナリ。凡議論文章ヲ以テ人心ヲ擊維スルコト固ヨリ缺ベカラズト
雖。亦未ダ形ヲ以テ之ニ示スヨリ。人心モ入り易キモノハアラズ。之ガ爲メ。昭規謫劣
ヲ省ミズ。

明治十四年二月廿二日ノ。勅裁ヲ奉戴シ。

賢所遙拜所ヲ。府下盤殺ノ下。清淨ノ地ニ設ケ。普ク臣民ヲシテ遙拜ノ美ヲ舉メ。大ニ
 報本反始ノ心ヲ發揚セシメ。萬邦無比ノ國體ヲシテ。益々赫々タル所アラシメント
 欲シ。東西奔走盡力スル事。茲ニ十三年。今又國教大經ヲ編シテ以テ同感ノ士ニ告ク。抑
 ヲ國教ハ。勅裁公文ヲ奉シテ。大經ヲ建テ。以テ其實ヲ舉ケ。秩序肅然トシテ。紀綱振張ス
 ルトキハ。外教ノ如キハ。何ゾ之ヲ問フヲ須ヒンヤ。苟モ乃祖乃父ガ。天祖ノ皇室ニ奉仕
 スル往蹟ヲ顧ミ。勅意ノ存スル所ヲ奉スルトキハ。誰レカ國教ノ大經ニ悖リ。君臣ノ
 大義ニ背キ。恬然トシテ自ラ足レリトスルモノアラント。故ニ漸次贊成ノ美ヲ舉テ以
 テ。卷末ニ記ス。朝野ノ諸君。益々振テ。推戴スル所ロ。アラント云爾

靈魂學士 飛田昭 規謹言

國教大經 第四號終

明治廿六年八月五日印刷
 明治廿六年八月十日發行

定價金六錢

著發 述行 人兼

飛田昭

東京市牛込區東五
 町三十八番地



印刷人

近藤圭造

東京市麹町區飯田町
 五丁目廿六番地

印刷所

近藤活版所

同所

149
144

賢所遙拜設立懇請書
神宮教_ニ通牒復文
勅裁公文問答

國教大經

追加
第五號

神道本局管長子爵稻葉正邦卜往復文
勅裁公文問答

公文內閣認可

賢所遙拜設立懇請書
神宮教通牒復文
勅裁公文問答

國教大經

追加
第五號

神道本局管長子爵稻葉正邦卜往復文
勅裁公文問答

公文內閣認可

金

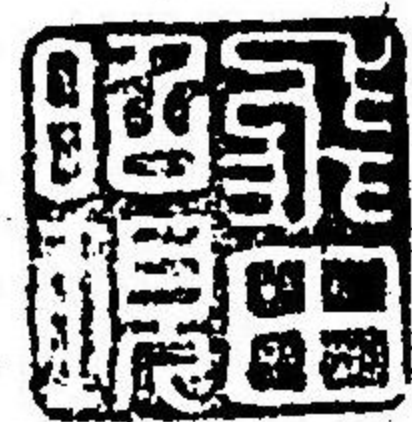


區



無

缺



旨趣

賢所は天祖威靈の憑る所歴世の皇靈を仰て以て天職を治め給ふ處なりとの勅語あり今や天運循環し百度惟れ新にして神器を永遠不侵の所に奉せらるゝ誠は國體を重せらるゝ所以にして固より私議すへきものにあらざるなり謹て考るに現今人智日に進むの時に當り人民をして國體の尊嚴なるを知らしめずんば他日に至り倫理を壞滅し秩序を紊亂する事無きを保せざるは有志士の常に憂とする處なり故に全國有志の賛成を募り且つ其筋の認可を仰き府下輦轂の下に造拜所を設け人民をして造拜せしめ國體の

尊嚴ある所以の道を知らしめんと欲す因て同志の諸君朝野を問はず左の名義に基き廣く賛成あらむ事を希望す

明治廿三年七月

從三位 方平 書

誓 旨

天壤無窮の寶祚を奉戴し。金甌無缺の國體を固守し。皇國臣民の本分を盡すべし

發 起

明治廿四年三月

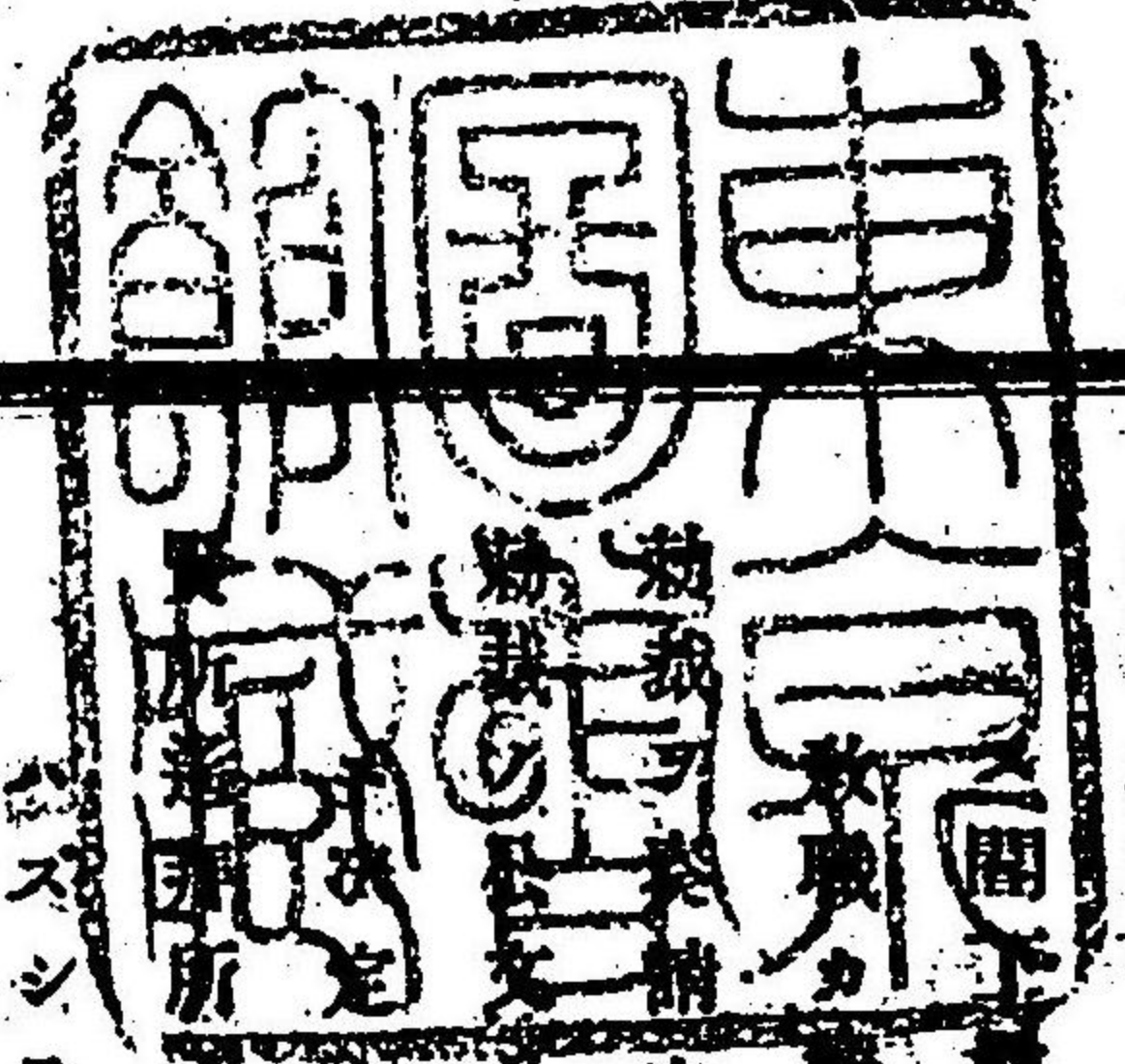
飛田昭規謹言

國教大經

追加第五號

靈魂學士 飛田昭規 編述

賢所遙拜所設立懇請書



元教部省少講義布衣飛田昭規謹テ元神道事務局副總裁岩下方平君閣下ニ白
閣下ニ神道事務局ニ副總裁タルヲ總裁一品親王殿下ニ共ニ海内ノ神官
教職カ請願ヲ容レ祭神ノ
勅裁ヲ奉請セラレ明治十四年三月廿三日始テ神道事務局
勅裁ノ旨ヲ至賜アリシヨリ全國ノ神官教職及ヒ一般ノ衆庶至リ祭神ノ儀茲
夫レ以テ以テ降神道事務局ニ於テハ
設立シテ普ク天下ノ臣民ニ參拜セシムベキハ當然ナルニ事茲ニ及
ハスシテ祭神ノ
勅裁ヲ空シク有名無實ニ放任スルハ特ニ怪訝ノ至リニ堪サルノミナラス
勅裁ヲ怒カセニスルハ抑モ何事ソヤ之ヲ當事ノ事情ニ徴シ昭規熟ク思惟スルニ

以前ノ管長田中頼庸カ淺見無識ナルヲ以テ此時ニ於テ神道ノ旺盛ヲ謀ラヌ
 シテ己ノ私擅ヲ成シ遂ニ八放九殺ノ分裂ヲ來シ神道事務局ハ是カ爲ニ蹂
 躪スル所トナリ隆盛ヲ致スノ機變シテ廢絶スルノ不幸ヲ生シ總裁宮井ニ閣
 下ガ國ニ尽スノ哀情モ亦烏有ニ歸セントス是ニ於テヤ昭規賤劣不才ノ身ヲ
 願ヒテ慷慨悲憤ニ堪ヘス身ヲ挺シテ
 賢所遙拜所ヲ設立スルニ執掌シテ千苦万難毫モ意トセズ一家ノ貴財ヲ舉テ此事ニ
 從事スルコト茲ニ廿四年某間諸官ノ人員及ヒ神宮教導職及ヒ衆庶ノ贊成ヲ受
 テハコト殆ク六十万人ニ達ス然リ而シテ或ハ宮内省ニ出願シテ却下セラレ
 或ハ内閣或ハ内務省或ハ東京府ト力ノ及ス所之レヲ尽チテハナシ然レモ
 今ニ至テ一ツヲ認可ヲ得ル能ハス且ツ昭規此事ニ熱心ナルヤ敢テ一个ノ
 私欲ヲ狭ムニ非ス又利名ヲ干ムルノ心アルニ非ズ唯一片ノ赤心國ニ報シ君
 ニ忠スルノ微意アルノミ昭規今年已ニ七十餘ノ馬齡ニ達シ豈ニ人世ノ名聞
 利達ヲ求ムルノ餘念アラシヤ只合サニ我國一般臣民ヲシテ
 賢所ヲ遙拜セシメ宗廟ニ奉祀スルニ當ラシム

賢所

ヲ遙拜セシメ宗廟

ニ奉祀スルニ當ラシム

列聖ノ仁恩餘澤ヲ臣民子孫ノ將來ニ擴張シテ忘却セサラシメ
 今上陛下ノ
 勅裁ヲ奉戴シテ一般衆庶ニ普ク國體ノ尊嚴ニシテ
 勅裁ノ宏遠ナルコトヲ知ラシメ一般ノ臣民ヲシテ我國
 神統連綿万世一系ノ
 皇統ヲ推戴擁立シテ忠君愛國ノ美俗ヲ永遠ニ保存スルコト夫レ此ノ事ニ於テ白髮
 ノ老軀ヲ犧牲ニ供シ斃シテ己ノ精神ナリ閣下博覽明識能ク古今ノ事理ニ
 通シ維新以來頭職ニ在リ又幸ヒニ神道事務局ノ副總裁タリ疾クニ昭規ノ哀
 情ヲ看破セラレ既ニ贊成ノ認諾ヲ賜フ此ヲ以テ今ヤ大ニ閣下ニ向テ懇請ス
 ル所アリ伏シテ願シハ閣下ヨリ 宮内大臣ニ向テ
 賢所遙拜所建設ノ認可ヲ請願セラレンコト切ニ希望ニ堪ヘサルナリ閣下力ヲ出
 シテ此事ヲ成功スルハ則チ上ハ
 勅裁ノ聖旨ヲ實行シ中ハ臣民忠愛ノ永鑑ヲ垂レ下モ昭規ノ素懷ヲ成スニ在リテ
 天下ノ幸甚此他ニ出ルモノナシ依テ神宮教ニ對シ昭規カ商量シタルノ手續

ハ之ヲ別紙ニ録シ併セテ電覽ニ供ス燕辞ノ錯乱要領ヲ盡ス能ハス書外下問
ニ明悉セント欲ス誠惶誠恐謹言

元神道事務局會議諮詢掛

元教部省少講義

飛田昭規 叩

明治廿七年三月

元神道事務局副總裁

子爵 岩下方平殿閣下

日比谷神宮教ニ通牒文

實所遙拜所建設之儀ニ付御稟議申上候謹而明治十四年三月廿三日勅文第一
條宮中ニ被齋祭所之神靈遙拜奉仕可致ト有之候ハ賢所遙拜之儀者神宮教
院ニ於テ御建設之準備ニ相成候哉昭規ニ於テ百方盡力仕今日ニ至ル十餘ノ歲月
ヲ積ミ万艱ノ困苦ヲ嘗メ或ハ内閣ニ或ハ宮内ニ或ハ内務ニ賢所遙拜所建設ヲ
懇願シテ止マヌ是レ大ニ昭規ノ誤ツ所ニシテ内閣宮内内務ノ容易ニ關リ知ル所
ニ非ルハ疾クニ陛下ノ宸裁ニ由テ今日神宮教ニ於テ爲スベキノ勅許アリタ

ル者ナリ是レ之ヲ知ラズシテ此事ニ奔走セシハ實ニ昭規カ不明愚才ナリ今ヤ右
ノ聖勅ニ基キ神宮教院其責ニ任スル事ヲ傳聞スルニ及ンテ豁然タリ於之今日
之ヲ願ミ聖詔ニ基キ建設之儀日夜精神ヲ勞シ大方ノ諸君エ協議ヲ遂ケ置キタ
ルノ既ニ八九分ニ相達シ賛成人ハ諸縣遠近ヲ問ハス陸續申入モ有之此上一層ノ
勉厲ヲ以テ十分成就候見込ニ御座候乍去御教ニ於テ若シ同様御計畫ニ相成候ハ
、將來支梧致シ候半カト掛念致シ候既ニ前文ノ如ク十分盡力此上成就之見込モ
相立候故可相成ハ御教内之ノ權限ニ候間遙拜事務ノ一部ハ昭規エ御委任ニ相成
度勿論聖詔ニ體シ毫モ私心ヲ狭ミ候義ニ者無之要スルニ内ニハ國家ノ風教ヲ
維持シ外ニハ侵入ノ邪教ヲ拒キ第一固有之神氣ヲ尊崇シ私魂ヲ鼓舞作興セシム
ル精神ニ出テ毫モ私心無之全ク國家ノ爲メニ計画候故此一部ハ強テモ昭規ニ御
委囑ニ相成度候抑モ昭規ハ從前此一段落祭神論ニ發起シ即御局中ノ人員ニテ有
之候故申迄モ無之赤心御協議申上候間宜敷御回答相成度國教大經二冊相添此段
申進候也

明治廿六年十二月二日

飛田昭規 叩

神宮教

藤岡 好古殿

篠田 時化雄殿

頃々目下諸縣賛成人出京中故突然會議モ相開キ候見込ニ御座候へ者至急御回報奉待候也

復文

本月二日附御紙上ヲ以テ賢所遙拜所建設云云御協議ニ預リ候處右遙拜所ノ儀ハ先年勅裁以來當敷院神殿ト相定リ居候ニ付毎月一日ヲ以テ式日ト致シ敷院及ヒ全國各本部ニ於テ遙拜式執行罷在候次第ニ付當敷ニ於テ殊更ニ遙拜所建設者必要無之候間折角ノ御協議ニ候得共御見込ノ趣ニ難應候條此段當課ヨリ及御答候也

明治廿六年十二月十二日

神宮教

事務課 岡

飛田 昭規殿

往文

勅裁ニ休シ謹而申上候明治廿六年十二月十二日附ノ御書中 賢所遙拜ノ儀ハ勅裁以來當敷神殿ト相定リ候儀被申聞候 勅裁ハ神道事務局ト有之候得共神宮教トハ無之候

祭神管長勅裁願并昇神之節者神殿昇神祝詞ト有之昭規事會議之折ハ諮詢掛ニテ出席仕候ニ付確ト承知罷在候前十二日附ノ書面昭規差出候ニ神宮教ト記セシハ前後共ニ全ク飛田昭規カ誤リ也

依之昭規編輯ノ書國教大經中ニ記載スル 公文ノ位置本書ニ附キ別紙之通り乍御手数數明細ニ寫シ御回シ被下度至急ヲ要シ相願候也

明治廿六年十二月十三日

飛田 昭規 岡

神宮教

藤岡 好古殿

篠田時化雄殿

別紙

上申書

神道事務局會議々員總代大教正鴻雪瓜同平山有齋ヨリ祭神管長撰定之儀別紙之通リ具上候ニ付何分之御指揮奉仰度此段上申候也

神道事務局會議々長

明治十四年一月卅日

岩下方平

大政大臣三條實美殿

上申之趣左之通リ被仰出候事

明治十四年二月廿三日

一宮中ニ被齋祭所之神靈遙拜奉仕可致事

二一品職仁親王總裁ニ被仰付候事

一議官岩下方平副總裁ニ被仰付候事

宮中ニ被齋祭ノ神靈

公文内閣認可

天神地祇
賢所
歷代皇靈

明治十四年二月廿三日

大政官

右縦横位置明細ニ御記載ニ被下度奉願候也

明治廿六年十二月十三日

飛田昭規

實所遙拜殿建設之儀ニ付過般御照會有之本月十二日付ヲ以テ當課ヨリ及御答候處猶十三日付ヲ以テ御問合セノ次第モ有之候へ共右ハ御面談ヲ遂ケ委細申述度候間當院近傍御通行之節御立寄ニ相成候様致度此段申進候也

明治廿六年十二月十七日

神宮教院教務課 印

飛田 昭規殿

本月十三日附親展ヲ以テ面談可致義ニ付近傍通行之節可立寄儀被申聞候得共此儀ニ於ルヤ稻葉管長ニ及照會候義有之候故都合ニヨリ又々御照會可申哉モ難計候間左様御承知被下度此段申進置候也

明治廿六年十二月十八日

飛田 昭規 印

神宮教

藤岡 好古殿

篠田 時化雄殿

神宮教問答之手續書 別紙

維時明治廿六年十二月廿七日神宮教ニ出頭候處我ハ山田大路ナル者貴所ハ離殿ニテ何ノ用向有テ來ルヤト問フ昭規答テ曰ク拙者ハ飛田昭規ト申者ニテ先頃當教務所ヨリ親展ヲ得テ參リ候其次第ハ別紙ニ申置候得共遲遠ナカラ參向致候ト申候山田大路申スニハ當院ハ先般ヨリ事務取片付一同閉局ニ相成候得共折角ノ御出ニ付近傍ナル松本正恭方ニ申遣ス可キ間明廿八日罷出可申旨答ニ付翌廿八日午前十時出頭致シタリ然ルニ松本正恭申スニハ昨日突然罷出候様教院ヨリ申來リ候ニ付出頭致候抑御談ノ儀ハ何等ノ事ニ候儀ト申スニ付 實所遙拜所ノ件ニ付最前書面差出候回答ノ儀云云也ト申述候然ルニ松本正恭答ニハ豫テ貴所ハ會議ノ節諮詢掛ニテ相誥居リ候得者確ト承知ノ事ナリ其後トテモ其事ニ盡力致シ居候由ナレハ今更申迄モ無之候得共御尋ニ付拙者心得ノ儘申述ベシ抑モ祭神管長 勅裁ヲ仰カン事ヲ出願スルハ全國神宮教職一致連合シテ神道事務局ヨリ出願シタル者ニテ神宮教ノ名稱ニ非ズ夫レヲ神宮教ニ 勅裁ノ有リト云ハ甚以

不當ナリ神宮教トハ田中頼庸ノ私祭ニテ 勅裁ニ關スル者ニ非ス神道總裁一
 品頼仁親王ハ 天皇陛下ノ大御手代ト成テ神道ヲ總裁ス是レ開闢以來神道ノ熾
 ナル前後ナキ所トス時ナル哉此時ニ相集ル人々ニハ神宮始メ官國幣社ノ長次官
 各分局長直轄教會長及ヒ有志ノ面々三百餘名神道事務局ニ集會シ下シ賜ハル所
 ノ 勅裁公文ヲ拜觀奉戴シテ神宮教ノ祠宇ニハ納メヌ 賢所遙拜スルニ及ヒ大
 庭ニ竹ヲ立テ夫レニ注連ヲ張り荒薦ヲ以テ筵トナシ遙拜セシナリ其後ニ至リ
 月日遙拜ノ事ヲ除キ獨立教會ヲ設立シ神宮教ト名クル者ヲ團結シ神道事務局ヲ
 ハ度外視シタリ此時ニ方リ總裁宮ハ已ニ職ヲ辞スト雖モ副總裁岩下子爵ハ依然
 トシテ神道事務局ノ名稱ヲ有セリ然ルニ之ヲ擱キ田中頼庸ノ方法ニ倣ヒ各教管
 長各自ニ獨立教會ヲ組織シテ已レカ自由ヲ爲セシヨリ神道事務局ニ對スル義金
 ヲ出スモノナキヲ以テ神道事務局ハ嗚呼已ヌル哉ノ場合ニ臨ミ如何トモ爲ス能
 ハズシテ祭祀教導ノ方法相立サルヨリ更ニ其義金ヲ出ス可キ約定ヲナス然リト
 雖モ素ヨリ其主祭トスル自己適宜ノ神ヲ祭リ陛下ノ 勅裁アリシ處ノ 賢所遙
 拜ノ儀ハ遂ニ湮滅ニ歸セシナリ然ルニ神道事務局建築ノ儀ハ明治十年ヨリ事始

メテ全國各神官教導職其他有志ニ課シ神社氏子教職ハ各信徒ニ及ホシ其建築費
 ハ區役所或ハ縣廳ニテ取纏メ神道事務局ニ納メタレハ神道事務局ハ則チ全國神
 官氏子教職信徒ノ共有物ニシテ所謂全國人民ノ所有タルヤ疑ヲ容レサルナリ夫
 レヨリ各神道ノ教導職或ハ十教或ハ八教或ハ九教ト變シテ獨立教會ヲ組織セシ
 ナリ然ルニ實行教前管長柴田花守ガ曰ク 勅裁ヲ奉戴シナカラ 賢所遙拜所ヲ
 設ケザルハ 陛下ニ對シ恐縮ニ至リニ堪ヘストテ 賢所遙拜ノ事ヲ發起シ各私
 宅ニ於テ月々番地ヲ定メ遙拜ノ事ヲ成ス然レモ是レヲ共ニセサルモノ教職十教
 ノ内ニ二教アレハ年々一回ニハ過キタリケル素ヨリ田中頼庸ノ一己ノ志趣ニ出テ
 タルモノナレハ神宮教順番ノ時ト雖モ病ト號シテ出テサル事有リ其時ニ臨ミテ
 モ神宮教ノ祠宇ニ於テ遙拜式ヲ舉行シタル事ナシ故ニ明治十四年以來貴所カ
 賢所遙拜所設立ノ事ニ吾輩モ賛成ヲ表シ全國ノ神官教職諸氏ハ申ニ及ハズ悉ク
 賛助セサルハ無カルヘシ依之正恭ニ於テモ神宮教ニ 賢所遙拜ノ事アラハ何ソ
 貴所ノ盡力ニ賛成スルコトアル可キヤ其後ニ至リ神道本局ト云フ一教出テタルヨ
 リ諸教ニ於テ愕然タリ此時ニ至リ神道事務局ニ有ル所ノ 勅裁公文及ヒ諸帳簿

共ニ神道教稻葉正邦ノ持テ去ル所トナリ目今ノ訴訟ハ此ニ起因スル者ナリ是ノ如キ次第ニヨリ神道事務局ハ終ニ廢絶ニ歸シ惜トモ猶餘リアル事ナリ夫レ神道事務局ト神宮教トハ素ヨリ一種特別ノ者ニテ神宮教ニハ勅裁ノ公文之レナク依テ公文ヲ施行スルハ權利ハ之レナク候ト飛田昭規ニ向テ松本正恭確答セリ

右ノ事由ナレバ勅裁公文現今何レニ在ルヲ知ラズ又勅意ヲ奉戴シテ建設シタルニ賢所遙拜所アルトナシ然レバ祭神確定ノ聖勅ニシテ今是ノ如ク空文ニ屬セザルハ全國教職ハ固ヨリ一般氏子人民ニ於テ坐視ス可キニ非サルモノト思考致候此段手續書トテ懇請書ニ付帶シ進閣仕候誠惶謹言

明治廿七年三月 元教部省少講義 飛田昭規 印

元神道事務局副總裁 子爵 岩下方平殿閣下

神道本局管長子爵稻葉正邦ト往復文
勅裁 公文問答

元教部省少講義布衣飛田昭規謹白
御伺文

今般左之書籍ヲ出版仕リ 公文ノ書式等其筋エ相伺候處書表ノ体裁ハ本書ニ付記載可然趣ニ付作御手数數御記載被成下度此段相願候也

牛込區東五軒町二十八番地
福島縣平民 飛田昭規

國教大經中へ内閣公文抄録出願ノ件内閣ニ於テ許可相成候條此旨相心得可

明治廿六年三月七日

東京府知事富田鏡之助 印

公文

上申之趣左之通り被 仰出候事

明治十四年二月廿三日

一宮中ニ被齋祭所之神靈遙拜奉仕可致事

一品職仁親王總裁ニ被 仰付候事

一議官岩下方平副總裁ニ被 仰付候事

宮中ニ被齋祭ノ神靈

天神地祇

賢所

歷代皇靈

置位横壁

寸法
位置

明治十四年二月廿三日

大政官

右明細ニ御記載被下度奉願候也

明治廿六年十二月十三日

飛田昭規

神道本局管長稻葉正邦殿

再伺(音文)

去年明治廿六年十二月廿四日附ヲ以テ御照會申上候賢所遙拜之公文之位置御伺申候處爾今御回答無之甚以差支候間至急御回答有之度此段申進候也

明治廿七年一月十七日

飛田昭規

神道本局管長稻葉正邦殿

賢所遙拜之公文位置ニ付御照會之趣了承敷多書類中容易ニ取調兼候間至急ヲ要スル場合ニテハ何分御請求ニ應シ兼候此段御回答候也

一月廿二日

神道本局

庶務課

飛田昭規殿

再請書

昨廿二日御回答。實所遙拜ノ公文ハ書類中ニ付容易ニ取調兼ルニ付至急ヲ要スル場合請求ニ難應旨有之昭規一驚ヲ喫シ候。勅裁之公文ハ特別ニ取扱有之ハ必然ナレバ搜索セシムルヲ以テ不分明ナリト固ヨリ。至尊之。勅裁ニ出タル公文ナレバ。閣下自カラ之ヲ搜索スルハ大義ニ於テ當ヲ得タリトス何ソ之ヲ神道本局ノ雜務ニ委センヤ是ノ如キハ昭規ノ甘受キザル所乞フ今一應御取調被成右。勅裁公文ノ位置及ビ有無共判然ト御確答有之度此段及再請候也。

明治廿七年一月廿五日

元教部省少講義

飛田昭規 叩

神道管長子爵稻葉正邦殿

(未決)

靈魂學士飛田昭規編輯

本朝黨派史鑑

序	緒言	飛田昭規述	渡邊國武君
題字	同詩	副島種臣君	飛田昭規述
實行教前管長		間中雲鳳君	柴田花守君歌
		男柴田禮一君筆	柴田禮一君筆
跋		西園寺重滿君	西園寺重滿君

緒言

抑本朝の國體。宇内萬邦の上に卓立し。皇統連綿として。君は上に君とし。臣は下に臣とし。君臣契合千歲偷る事なし。苟くも臣たるもの偏へに忠孝を思ひ。國體を尊び。國威を張り國光を揚ぐることを務むれば以て則ち足れりとす。何ぞ敢て内に朋

黨を結び。兄弟牖に闖くことを之れ要せんや。抑々黨派の起るもの。是れ革命國の風習にして。力ら強きもの進んで金冠を戴くの俗實に之をして然らしむるなり。試に指を屈して海外を列擧すれば。支那帝王世次數十代。朝鮮も亦其君を易るもの數回。英國は何ぞ一統の王國ならんや。佛國は王政共和屢々更迭し。日耳曼。埃太利。葡萄牙。伊班牙。魯西亞。等の其王と稱し。帝と稱するもの皆是れ大盜。志を得て帝と稱し王と云へるのみ。亞米利加と共和を以て國を立るの輩。何の國土か能く基を開らき統を垂れし創造の初めより今に君臣一貫して變せざるものあらんや。故に黨を結び。徒を集め幸に志を得るあるに於ては。一嶋國の小兒。拿破崙の如きも。急ち進んで佛國に帝と稱し。一驛の亭長。劉邦の如きも。一躍すれば支那を掌握するに至る。故に革命國に在ては豪傑の生する時と。帝王を望まざるは寧ろ。豪傑の本領を尽さ。るものと謂はるへかたず。名は君臣たりと雖も。其實は僭號の力量。智力相如かさるか故に首へを低れて臣と稱ばるゝに過ぎざるのみ。之に依りて國家事ある時は。帝を謀り。王を望むもの所在颯起し。万一を僥倖するの徒勝て數ふべからず。是を以て平時に在りて黨を結び。徒を集め。互に相軋轢して。權力を狙豆の間に争ひ。封

豕。長蛇。其吞噬を逞ふせんとす。是れ萬邦の俗なり。今假へ之を改めんと欲すと雖も。其本既に亡ふ何を中心として之を改更することを得んや。然れども彼亦綱常倫葬あり。一たび國君たるに及びて。相率ひて之に隨ひ共に翼戴して。俯伏仰視し之に背くとき。賊となし終に以て秩序を立て以て。上下を分てるのみ。本朝の如きは。大に之に異なり。綱常倫葬之を立つるにあらすして自ら立ち。何等の事ありと雖も。君統の外に於て君ある事なし。乃ち父母の外に父母あらざるか如し。是を以て純忠至誠。君を尊敬し。奮勇勉勵國を保護す。物を開らき務を成し。國力を旺にし。國運を盛にするを期せば。何ぞ徒黨を集め。輔同排異一家兄弟の間に波瀾を翻覆し。火焰を吐吞るを須ん。凡そ朋黨は革命國の事なり。本朝人宜く爲すべき所ふあらざるなり。余常に朋黨の亂階をなさん事を憂ふる事久し。閑日古今史乘を涉獵し。事の黨派に關するものを抄録し。其深委を詳よし。朋黨の本朝に於ける其害たる所以を知らしめんとす。或は立憲政治には黨派なかるべからずと。何爲そ其然るや。英國に佛國に立るを以て之を言ふに過ぎざるへし。彼の國俗は争奪を以て王位と得べきの國なり。政權を争ふが如きは固より其所にまて。黨派の起る亦宜なり。本朝に在り

ては。黨派なくんば皇室に忠なるを得ざるか。黨派なくんば國威を増し國光を放つこと得ざるか。何ぞそれ然らん。全國一致至公至正を以て。忠君愛國の赤誠を尽し君民共治の美を致さば。是又宇内無比の立憲政治にあらずや。其黨を以て立憲に伴ふものとするは。余其何なる事を知らざるなり。故に本朝黨派史鑑を著し。其黨派の創まり。神代に筆を興し。神武天皇即位より代を経る事。一百廿三代。年を閲する事二千五百五十年。明治廿四年十二月。國會解散に終る。看る人夫れ是れを暇せよ。

明治廿六年一月

目次

- 天孫降臨に際し國神解黨の事
- 神武天皇東征の日長隨彦東國に黨立せし事
- 綏靖天皇即位の日手研耳命自由黨を組織せし事
- 崇神天皇御宇出雲振根南海に黨立せし事
- 天慶に平將門藤原純友東西に黨を成す事

- 奥羽前九年後三年黨を成す事
- 保元平治の亂源平兩氏黨を成して相争ふ事
- 承久の亂北條氏黨を成じて三帝を各所に遷す事
- 南北兩黨帝位を争ふ事 附 餘聞
- 應仁の亂山名細川兩黨政權を争ふ事 并 殘黨割據の事
- 織田信長應仁の殘黨を討ちし事
- 豊臣秀臣黨派の弊害を知る事
- 石田三成淀殿に黨して關白秀次を亡す事 附 畜生塚の事
- 小山秀政片桐且元大政所殿に黨して天下の無事を謀て成らざる事 附 餘聞
- 關ヶ原の役石田三成上杉景勝共に黨を成して徳川家を謀る事
- 徳川氏黨派の弊害を解して太平の基を成す事
- 切支丹の賊天草島原に據て黨を結ぶ事
- 由比正雪徒黨を組織する事

- 大鹽平八郎大坂に黨を成して斃る事
- 土岐與左衛門黨を結んで上州高崎に據らんとする事
- 水戸正好二黨の原因及び結局の事 附 餘聞
- 會藩敵を玉坐の元に避る長藩禁闕を犯す黨派の事
并 御製 高松三位保實卿勅答
- 王政復古の際奥羽諸藩黨を成して同盟する事
- 愛宕通旭外山光輔京城に黨を結ぶ斃る事
- 大和天忠組黨派の事
- 雲井龍雄黨を結んで徳川家を回復せんとする事
- 大樂源太郎黨を結んで兵制改革を怨望する事
- 前參議兵部太輔前原一誠黨を成して賊となる事
- 江藤新平黨を爲して賊と成る事
- 島田一郎徒黨して内務卿を赤坂に斃す事
- 高知縣士黨を成して岩倉右大臣に疵る事

- 西郷隆盛大黨を結んで政府に詰問せんとして斃る事
- 相原尙聚黨作爲すを惡んで自由黨板垣退助を刺す事
- 竹橋の兵士黨を結んで不平を訴る事
- 自由改進黨の兩黨政府に反對し初期の國會解散の事

合計三十五條

紙數千枚程

未刻

27-19

明治二十七年三月五日印刷

(定價金貳拾錢)

明治二十七年三月十九日發行

東京市麴町區飯田町二丁目四十一番地

編輯者

飛田昭



東京市小石川區小日向水道町八十六番地

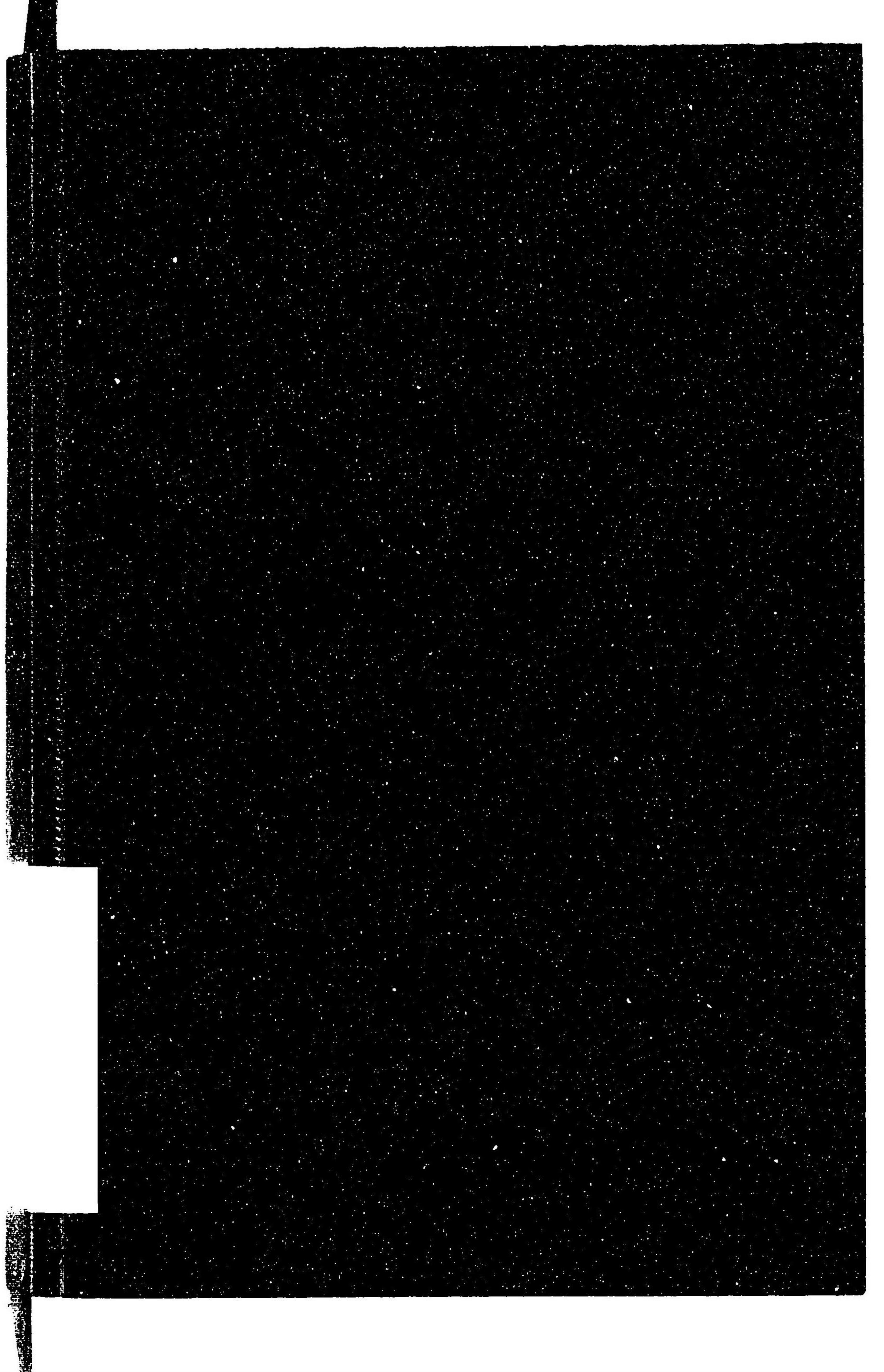
發行者兼

中郵守

東京市神田區仲猿樂町八番地

印刷所

秀名社



9

100

国教大経

追加第四号

国立国会図書館